

まず、どのようなポイントで戯曲を読ませていただいたかを簡単にお話したいと思います。私はダンス作品の演出家、またダンサーとして活動しており、演劇の分野ではありません。ですので、「おもしろさ」「驚きがある」「現代の社会にどのように対しているか」などといった内容や戯曲自体の狙いはもちろん判断基準にはしましたが、大事にしたのは、書かれた戯曲から、演出家として舞台作品にしていくイメージがどんな風に広がっていくか、また、書かれている言葉、セリフのリズムに、身体をどのように引き受けられる「懐の深さ」があるか、というところです。

『良いキャンペーン』

荒廃した SF のような、常に乾きのあるカタカナがやたらと多いセリフの羅列の中に、ふと登場する生々しい食べ物の描写がとても印象的な作品でした。特に、鰻の描写や、フライドポテトの描写は、灰色っぽい景色をイメージさせる作中に、急に生々しく色鮮やかに出現し、文字を読み進めていくという行程の中ですっかり忘れていた（使われない）嗅覚が呼び起こされるような感覚があります。これは、作中で後々出てくる「体の感覚が失われていく病」と繋がり、自分が無意識的に所持している機能が意識化され、ハッとさせられます。

初めは、若い俳優が演じているイメージで読んでいたのですが、途中から、この作品はもしかしたらちょっと年配の俳優がやると良いのではないか、という想像が広がりました。

そういえば若い頃、お年寄りになれば、「お年寄り」の喋り方になっていくのだと思っていたのですが、そうではないよな、みたいなこと。時代設定も微妙な近未来なので、今の若者が「お年寄り」になっている想定で、60代70代くらいの俳優が「シャバいなあ!」「草」とか言ったりする、みたいにこの作品がなると、現代社会を捉える視点が変わりそうで面白そうだなと思いました。

あと、作品全体に、穏やかな死臭と生きる力みたいな両方のエネルギーを感じました。

ひたすらヘリコプターで負傷兵を運ぶだけの長回しの暗い映像の中に、突然絵の具でボディーパーentingされた裸体の男女の描写が挟み込まれる映画、アモス・ギタイ『キプールの記憶』を思い出したりしました。

『いみいみ』

これは、最初読んだ瞬間に、やられたなと思いました。AはA、BはBというように、同じ言葉、文章が2回繰り返し提示されるだけなのに、そのことにより、その言葉を読む（聞く）私たちは、いちいち自身の認識を確認する、問われることになる。

特にわかりやすい事情説明や、物語の展開もなく、また、「悲しい」「つらい」「苦しい」「腹立たしい」「嬉しい」などといった感情的なセリフも一切出てこないわけですが、一人の女性の、その感情や物語に回収されてしまう前（名前が付く前）の身体の「状態」が見事に抽出されていると思いました。

テキストのリズム、行間が振付のように提示されており、この作品の世界にのめり込まれる。

のめり込んでいると、突然に、「あなた」と、読んでいる（客席に座る）私が俳優によって名指される。ハッとする。そうして、取り込まれたり、突き放されたりしながら、最終的にその舞台に立つ俳優の身体に自分なりに変わっていくような、静かに丁寧に少しずつ観客の身体へ侵食してくるようなイメージができました。

私は、体感としてわからないことの方が、必死に「わかろうとする」力（想像力、観察力）が働くと思っています。

作者が男性だからこそ逆にさせる非常に冷静かつ高い解像度の女性の描写であると思いました。

『落ちる』

おもしろすぎる。さすがに 25 本戯曲を読まねばならず、読むということにやや疲れ出しているにも関わらず、めっちゃくちゃ読ませる力がある。

冒頭の【劇作家役の男の異常な長セリフからの、「助けてくれ。落ちているんだ」という男のセリフ、それに静かに首を振る劇作家】このど頭の展開からおもしろすぎる。

その後も、子供たちのしりとりや、突然出てくる犬、ずっとキレてる親方、リズムがずっと気持ちいい。

もちろん、ベケットの『ゴドーを待ちながら』は意識していらっしゃると思いますが、そんなことはどうでもいいおもしろさ。

後半、半ば投げやりになっているんじゃないか、と思われる血が出たりし出すシーンも、勢いがありすぎて読めてしまいます。

全体的に、あまりに身体には良くない感じがずっとあって、ポテトチップス止まらないとか、タバコ吸いすぎるとか、シュガーハイとか、そのようなドラッグ的作品だと思いました。

「劇作家」が中心に展開されていくので、身内ノリの作品だという意見も出ましたし、その通りだとは思いますが、自分の立場からとりあえず絞り出して書いてやるというハイカロリーで狂気じみたパワーを感じました。

おそらく、ご自身の「劇作家」という仕事に対し、強いリスペクトと、それと反対の疑いや失望のような気持ち、愛憎入り乱れていらっしゃるのだらうと想像しました。「出演者は劇作家がよい」と書かれていたことなど、それら全てひっくるめて演劇に対する捻くれた愛情表現のように感じました。

最後、せっかくこれだけエネルギーがあられるので、劇作家の物語から身体が溢れ出し、どんどん遠くまで飛躍して行ってほしいななどと思いました。

『Fusion,(フュージョン、)』

『Fusion,(フュージョン、)』は、5 作品のうち、唯一上演を見ている作品でした。

拝見した上演が大変素晴らしいものでしたので、戯曲として審査するときにはそちらのイメージに引っ張られすぎないように意識しました。

全体的に、空間や状態がト書きで非常にクリアに提示されている代わりに、セリフはほぼ説明的なものではなく、シェアハウスという密室の中で、なあなあになっている関係性や、きっちりした言葉を発さなくてもそれなりに日常をやり過ごせる生ぬるい空気感、あーまたか、みたいな常習

性、気だるさ、だらしなさ、が漂う作品だと思いました。

その中で、ベースにずっと敷かれている「暴力性」がこの作品のポイントかと思います。

例えば、登場人物の中にこの状態を問題だと捉えている役の人がいればいいのだが、その俯瞰する視点、客観性（大人の視点かもしれない）を意識的に徹底して排除しているように見えます。

「問題」を「問題」として取り扱うのではなく、問題化する前の事象を内側から突き破って書いているような。わかられてたまるか、みたいな反抗的な意識を感じる。

何がしんどいかわからんけど、とりあえずめちゃくちゃしんどい、みたいな行き場のなさ、救いようのなさは、東横キッズのリサーチなどをされて、抽出されたものかなと想像します。

最後、死んだ子供（マクドナルドハッピーセット）を食べるシーンがありますが、あまりにも恐ろしい。「幼さ」がイメージされるハッピーセットを「食う」というだけの行為の中に凄まじい暴力性を感じました。

現在私は刑務所でクラブの講師をしておりますが、「自分がやったことがどれだけ悪いことか」わからぬままやっちゃってしまっていることがあるのだろうかと感じることがあります。

戯曲内の言葉になり切らないようなセリフたちは、一応声として外に出せたものであり、実際にこの作品で表出したいのは、有り余る若さが故の行き場のないエネルギーが、思考や言葉の意味を越え溢れ出す「身体」そのものではないかと感じました。

現に、私たちはそれほど日常では正しく言葉を使っていないと思います。「あー」ていうことの中にたくさん情報を詰め込んでいる。それが他者にどう伝わるか、という賭け。そんなことを考えました。

『Plant』

前半、かなり説明的なセリフが続き、テーマが少しわかりやすいなと思ったのですが、読み進むうちに、作家の方が感じている、急速にルールが改訂されていく「現代の社会の流れ」への恐れのようなものや、真面目な「お話」から逸脱して行きそうな衝動の気配を感じました。

物語としては、非常にシンプルだと思いますし、ずっと冷静に物語が書かれている感じがするのですが、「隠していたが実は禿げてる頭に、植物が生えてきた」というくだりと、「おしっこ飲ましてほしい」というくだりに、強い熱量を感じました。

ありとあらゆることに気を使わなければならない現状に賛同する気持ちと疲弊する気持ちがマイクログリップによる意思疎通という形になり、もう何言っても傷付ける可能性があるなら、植物みたいになるしかないじゃん、が、実際にそうなる、という設定は、共感できる部分もあります。結構現実味のあるフィクションだと思いました。

また、作中に出てくる洗脳や信仰のようなものも、舞台芸術の世界にもある大きな問題かと思いました。

そうは言っても禿げたくないしおしっこ飲みたい！という欲求は、可能性だと思いました。

最後、少し演出家と女優という「演劇あるある」の物語に回収されていってしまう感じがもったいないな、と思ったので、そこを越え、禿げて何が悪いねん、でもいいし、おしっこ飲む意味でもいいんですが、そのような「現状」の中にある人間の欲望の方に向かえたら、身体、設定を超えてくる先、が見えてきそうだと思います。

これら5作品の中で、『いみいみ』を推させていただきます。理由としましては、いくつかありますが、まず、戯曲を読んで一番「温度」を感じたことがあります。

作品として上演される際、白め、または青めの明かり、空調は暖かいより少し冷ためが良い。これは、戯曲が言葉にせずとも提示してくる温度感の影響だと思います。

また、演じる身体ですが、様々な可能性があると思いましたが、この言葉たちのある意味での強さ、態度を引き受けられる身体が必要だと感じました。

例えば、何かしらの身体のトレーニングをしている俳優、ダンサー、そうではないにしても、ただ、歩いて出てくる、ちょっとした身振り、そういったことをかなり意識的にできる人がよいと感じました。

そして、演出すること自体が問われる戯曲だと思います。一見自由に見えて、手強さもある。このような決して「わかりやすくはない」、観客のイマジネーションが担う分量の多い作品が、公共ホールで上演され、多くの観客に問いを与えることは、情報に溢れ、AIがなんでもわかりやすく説明してくれる今、これからの演劇のあり方を考えた時に非常に重要だと感じました。